



鯛の鱗が、容赦なく顔に飛んで来る。シャリシャリという鋭い音が余計に、顔を背けたくなる嫌な感じ。わずか数秒間横を向いたがために、鱗へ指の腹を滑らせてしまった。

「痛っ！」

「えみちゃん、大丈夫なん」

えみりの叫びに、岩っちこと岩井が反応する。上京してまだ二年目の岩っちは、いつ誰と話す場合でも常に関西弁が飛び出す。えみりよりも三歳年上だけれど、見た目は三十歳過ぎにも見え得るし、どういうことか逆に老けた大学生にも見え得る、謎めいた二十七歳男子。

「あーん。痛いよお」

それでも、代わってもらおうとはせずに自分で鱗取りから捌きまで進めようとする。中ちゃんこと中森が、その様子を見てコメントする。中森はえみりに鱗取りのコツから捌き方までレクチャーした張本人だ。

「すごいなあ。スピードがどんどん速くなってる！」

魚を釣ったはいいものの、おかしなことに、捌き方を知っている者は皆無だった。グーグルの検索窓へ「鯛 捌く 素人」、「鯖 捌く 簡単」などというキーワードを、求めている情報がピンポイントで表示されるよう必死に打ち込む。すると、何となく参考になるページがいくつか出てきたので、それを継ぎ接ぎにして魚と向き合う。

死んだ魚の左目が十個以上、流しの内側からえみりを見つめている。三枚におろされた魚の残骸は、すべて同じ方向を向けて置かれていた。数時間前までは生きて動いていた魚たちが、血を抜かれ、身を剥がれた状態で佇んでいる。

餌にしていた海老が、切り裂いた鯖の腹から飛び出す。食物連鎖、という言葉が久しぶりに思い出す。この海老の腹を切ると、何かしら食物となった生物が飛び出してくるのだろう。生物界の広大さに驚嘆するのは、今日生命を海から掬い上げてきたからに他ならなかった。物思いに耽っている暇などなかった。

台所の隅に置いてある発砲スチロールの中を見ると、四角い大きな氷の隙間から魚たちの光る体がまだまだ積み重なっているのだった。気が遠くなるほどの膨大な作業。

終わりの見えなさ、を感じながら、えみりはただひたすら魚を捌き続ける。それが何かの修行であるかのように。

海釣りへ行きたいと言い出したのは、えみりだった。会社で違う部署にいる同期の岩っち、中ちゃん、そして同じ部署にいる同期の藪野こと藪野サンー彼は人並み外れたイケメンで、クー

ルな性格をしている（ように見える）。そして、そういうキャラにありがちなものだけれど、口数も少ない。それでも、外見の素晴らしさからそんなことは無問題とされるタイプであり、皆からイケメンだと認められているためか、「別格」的な意味で年上からすらもサン付けで呼ばれる一と話していたときのこと。夏に日帰りでも一泊でもいいので、皆で旅行へ行こうというところまでは話が進んでいた。

「釣りしたことあるん？」

岩っちが驚きと興味関心のミックスされた表情を見せる。

「うーん。昔、小学生くらいのときに、汚い川とか池で釣り糸垂らしてた。本格的な釣り経験はないんだけどさ」

それでも釣りをしてみたくなかったのには、理由がある。したことの無い何かを始めようとするとき、それは普通っぽくはない何かが大きなきっかけとなっている。

釣り、という言葉から連想されるものは、達成感に満ちた自分の顔。想像するだけで楽しくなった。もともとえみりは、狩猟精神が旺盛な女子だと周りから見られている。仕事でも恋愛でも物においてもそうだった。欲しいものはすべて手に入りたい。

自分が何かを仕掛けてそれに相手が食い付いてくる瞬間、えみりはいつも他では得られないほどの興奮を手に入れられる。心地よい類のぞくぞくとした感覚が、背筋を走るのだ。最近、それが生活から欠けていた。仕事、恋愛、趣味—えみりの生活の三大要素であるが、そのうち前者二つのうち一つでも歯車が噛み合わなくなると、すべてが上手く回らなくなる。共存し合う性質がある二つの要素。諸刃の矢ともいえた。

疲弊。墮落したことへの苛立ち、悔しさ。しばらくの間、くだらない男—自分勝手に嘔吐きで虚勢を張る癖を持ち、それに加えて虚言壁のある人物だった—に振り回され、時間を無駄にしたものだ、と時折後悔していた。相手を釣るのではなく、「自分が釣られてしまったこと」に関しても、怒りを覚えるようになった。

そこから派生した「リアルな釣りをすること」への願望。おかしい話のようだが、本当だった。

岩っち、中ちゃん、藪野サン、えみり、そしてえみりの女友だちである里奈、容子の六人をメンバーとして、夏の小旅行は幕を開けた。出発前日の金曜に、船やレンタカーの手配から集合時間決定までするという、ひどく慌しいスケジュールは岩っちが完全に管理していた。彼は旅の準備が好きなのだと、えみりたちは勝手に決め付けている。というのも、彼は優秀な旅プランナーらしく、レンタカーを借りては、休み中に友だちと日本中を回っている。「この崖でしか見えない星があります」という星があるとして、それがたとえどんなに小さいよく分からない名称の、少しも有名ではないマイナー過ぎる星であっても追求したいと思えば岩っちは、睡眠時間を削ってでも、走行距離がどんなに桁外れであっても、その場所へ向かう人間だということを知っていたから。だからこの作業を彼へ完全に、任せきっていた。

男女三人ずつで合コンのような感じだけれど、面白いことに、里奈は全員と面識がある。すくなくとも一度は顔を合わせている。容子は藪野さん以外と面識がある。そして、中ちゃん以外の男子には彼女がいて、えみり以外の女子には彼氏がいる。冗談半分にえみりは言う。

「私と中ちゃんだけフリーじゃん。私らがくっつけばちょうどいいけどね。なっかなか、そういうわけにもいかないのよね」

なんで、と里奈と容子がニヤニヤしながら尋ねる。二人の女友だちは、確実にえみりと中ちゃんをいい感じにさせようと企んでいる。そんな顔をしている。

仲の良い、何でも話せてしまう男友だちなんて、ほぼ女友だちみたいなものだ。隠していることがないし、隠したいこともない。すべてをさらけ出せてしまう相手。ときめいている相手に対して別の男の話などしないし、ダメ男との恋愛遍歴など語らない。語るに値しないというか、それを出すのはタブーというか「くだらない爆発」と言ってもいいくらいに、馬鹿げている。

「中ちゃんは、女友だちのようなものだもん。私の恥部をいっぱい知ってるからね」

恥部という普段使わない言葉に、二人は爆笑し過ぎて悶え苦しみ、えみりはそのことに満足して大笑いした。八月後半、土曜日の朝十時。大井町駅の裏で、三人は岩っちの運転するレンタカーが到着するのを待つ。

六人乗りの大きめな車が到着し、三人を拾っていく。助手席には藪野サン、前から二番目の列には中ちゃんが座っている。皆免許を持ってはいるが、運転できるのは岩っちと藪野さんだけなので二人に交代でやってもらうことになっていた。

中ちゃんが降りて座席を倒し、最後部席に乗る人が乗りやすい状態を作ると、すかさず里奈と容子が後ろに乗り込んで行く。軽く睨み付けたい気持ちを抑え、二人に強い目線を送った後、えみりは中ちゃんの隣へ座った。

青春。青い春。ガキっぽい。それにしても、二十四歳の夏は青春なのだろうか。いつから青春ではなくなり、大人な春が来るのか。ぼんやりと考えるけれど、よく分からない。若さ以外の何をもって青春というのかも、実は分からないのだった。

「こんな大人数での旅なんて、大学時代の合宿以来かもね。懐かしいなあ」

容子は三年ほど前のことを思い出していた。えみりと容子は同じ空手部に所属していた。夏と冬の体力面でも精神面でも厳しい合宿を乗り越えた仲。

「うん。いいね、こういうの。遠足みたい」

高速道路が土日一律千円になったせいか、道路は想像を絶するほど混んでいる。歩いた方が速いのではないかと思うほどに、のろのろとしか進まない時間が続く。

「なんかよく見ると、一人で乗ってるメンズが多いね」

えみりは窓の外に視線を走らせる。

「あ、ホントだ。えみり氏、頑張って！」

里奈が笑いながら言う。車乗ってたらナンパできるものもできないよ、とえみりが返すと車内は爆笑に包まれた。くだらないやり取りがこんなに面白いなんて。こういうのを幸せと呼べずに、何を幸せと呼べるだろう。そう感じるほど、渋滞に巻き込まれてはいても、車は夏を象徴するかのごとく、キラキラした時を刻みながらゆっくりと進んで行く。

目的地は熱海。「秘法館」という単語を見つけたえみりが叫んだ。

「秘法館だって！ 博物館みたいな感じかな？ 後で行きたーい」

「秘法館って名の付くものは、ほとんどがエロ系なんだって。仲の良い同性で行くのがいいみたい。絶対このメンバーで行ったら恥ずかしいよ」

容子は意外と事情に詳しくかった。秘法館は山の上にある熱海城のすぐ近くにあり、熱海城より目立っていたのに笑った。ロープウェイまで付いているとは。山頂から降りて来るロープウェイに目を向けて「あれは秘法館を見に行った人たちだろうね」などと勝手に予想しつつ、秘法館秘法館と騒いでいるうちに、予定時刻より一時間半ほど遅れたけれど、どうにか目的地へ到着した。

眼前に広がる太平洋。地平線が遠い。地面で揺れる蜃気楼。この心地よいはずのない暑さからさっと解放されたい。船は十二人乗りのものを六人で使用するから、わりと広い。

「どこから来たの？」

「今度は泊まりで来るといいよ。今日は夜に花火が上がるんだ」

「日に焼けるから日焼け止め塗り直した方がいいよ」

船の運転と釣りの指導をしてくれるおじさんは、驚くほど真っ黒く日焼けしている。それでいて白い歯をニッと見せて笑う一歯が白いのか、肌が黒いから普通の人より白く見えているだけなのか謎だ—ものだから、すぐさま松崎しげるを連想してしまう。格好はサーファーっぽさのある若々しい感じなのだけれど、実は還暦だというので驚く。髪も明るい茶髪なので、「妙な若々しさ」を持った中年といえるだろう。

すこしずつ陸を離れる漁船。最初の数分間は、風を切って進んで行くことが快感だった。対岸まで行きそうなほど、船は沖へとやって来た。決して大きい船ではない。巨大な生物に船底を突かれたら転覆するだろうというようなレベルの脆い船に思い始めた。

船は海の真ん中でようやく止まったと思うと、続いて船体が揺れに揺れ始めた。「遊園地にあるバイキングが壊れて縦横無尽に動くようになった乗り物」に乗っている感覚。えみりは奇妙な気持ち悪さを覚え始めた。これはマズいこれは危険。なんかヤバいというくらい分かる。絶望しちゃうじゃないか。

海の上。しかもかなり沖。帰るにも時間がかかる。というより、ここまで出てきて他のみんなが無事ならば、そう簡単には帰れないということだ。何時間か海の上で過ごすことは確実。この苦しさは、しばらくここにいるうちに収まるだろうか。物理的距離や長い時間を思うだけで、絶

望の度合いが高まる。精神的に弱ると、その影響はもろに身体を責め立ててくる。

松崎しげるが釣りの方法について説明を始めたけれど、それを聞いているどころではなくひたすら船酔い状態に陥っていた。真っ白な顔をして脚をがくがくと震わせているえみりを見て、しげるは船の後部へ行くことを勧めた。よろよろしながら最後部まで何とか辿り着き、ぼんやりするすこしも働かない頭で、立ったままひたすら海を見つめた。

動けなかった。動くとともに気持ち悪く、立ってそのままの体勢を保つのが最も楽。激しく吐き気を催したので、思いきって嘔吐する準備をする。胃のあたりから何かがせり上がる。得体の知れない液体と共に体内から排出されたが、それは車の中で食べたおにぎりに巻かれていた海苔の欠片だろう。まだまだ吐き足らないと感じてふらつきながらも、どうにか日陰へと移動し吐き気を胃の奥へ抱えたまま横たわる。

目を閉じていた。閉じずにはいられなかった。目を開けると余計に気分が悪くなった。最初の十五分ほどは起きていたものの、すぐにまどろんでしまったみたいだった。目を覚ますとすこし日が落ちていた。明らかなほど弱くなった日差しは、夕方の訪れを思わせる。腕時計をしておらず、携帯も離れた位置にあった。時間を確認できる余裕や力などなかった。時計がなければ時間を知ることができないという不便。

えみり以外にも「重症者」が出ていた。中ちゃんである。意識が明瞭になり始めた頃から、すこし周りを見渡せる落ち着きが生まれる。えみりが大股を開いて眠っているすぐ下の位置に、彼の頭があった。表情はというと、いかにも苦しそうな感じに歪んでいる。何とも奇妙でおかしな絵。お母さんから生まれる子どもといった凶。里奈が写真を撮ったそうで見せてもらったが、バラエティ番組の笑える写真選手権などで賞を取れそうな勢いでユニークな代物といえた。

反対側で容子がしげるに直接指導を受けていた。彼は男子には厳しく、女子には優しい。まったくの初心者なのに、藪野サンへ最初から怒っていた。

「違う違う！ そうじゃない！ まだ引かないから！ じっとしてなきゃ駄目って言うてんだろ！」

怒鳴りまくっていた。ところが容子に対しては、

「おお！ 鯛だよ鯛！ まだだね。すごいなあ。才能あるよ。そうそう、今引くんだ」

なんと三匹目の鯛を釣っている最中らしい。最初の頃は気持ち悪いと言って、えみりとぐったりしていた容子とは別人のようだった。

意外にも岩つちが途中で、気分の悪さを訴えて船後部へやって来た。海に向かって思いっきりゲーゲー言いながら、おそらく昼食べたものをすべて吐き尽くすくらい吐き出している。彼は三十分ほどじっと安静にした後、再び元の位置へと戻って行った。

「また吐いてもええんや。せっかく釣り来たんやから、釣りしたいわ」

強い台詞。

その後、里奈と藪野サン以外、順番に倒れた。六人中四人が一時的に気持ち悪さを訴えて休むなど、ものすごい船だ。おじさんは白い歯を見せた満面の笑みで言う。

「この揺れなんて序の口だよ。いつもはもっと揺れるんだから」

里奈と藪野サンも強過ぎた。まったく船酔いすることもなく、それぞれ集中して無言で、一心不乱に鯖を釣りまくる男女二人。その様子は何と頼もしいことだろうか。いつしか二人は「鯖姐さん」、「鯖兄さん」というあだ名で呼ばれるようになっていた。姉さんではなくて、漢字でのイメージはもちろん「姐さん」。二人だけで釣った鯖は合計して二十匹はいた。

船が完全に静止したしーんとした気配を感じて、そっと目を開けた。もう太陽は輝いていなかった。着いたよ、とおじさんが頭上から声をかけてきた。

容子がバッグを取ってきてくれた。そこから時計を取り出してみると、午後六時半になっていた。四時間ほど船の上において、三時間以上眠っていた計算になる。そんなえみりが、海釣りしたいと提案した言い出しっぺだったのが、おかしい話。

帰り道、車はさくさくと進んだ。岩っちが引き続き運転する。藪野サンも運転はできるけれど、仕切り屋な岩っちへ完全に任せ切っている。えみりは未だに藪野サンのことを理解できないている。何に対して熱があるのかを、周りへすこしも知らせることのないタイプの男。顔では笑っているけれど、実はすこしも笑っていない、というのとは違う。おそらく笑ってはいるのだろうけれど、基本的に一步下がっている感じ。同じ部署に配属されて一年とすこし経つけれど、なかなかミステリアス。人間嫌いではないと思うけれど、それほど人間好きでもなさそう。好き好んで休日に会社の人間と会おうとするタイプではない、自分とすこし似ている、とえみりは分析する。今回は、岩っちの押しが強かったからに違いない。断るに断れない優柔不断さがありそう。

リアルなイケメンは他の男子に尊敬の眼差しを向けられる。「お前はイケメンだからな」とある程度のことは許してもらえるから得。絶世のイケメンと出会ったのは、藪野サンが初めてだった。百人中百人、誰もが認めるイケメン。

誰の家で料理する、と岩っちが重要な疑問とも提案とも取れる言葉を発した。それぞれ不都合な理由があることが分かったので、えみりが家を提供することにした。妹と二人で暮らしているので、皆よりもとりあえず家は広い。さらに幸運なことに、今妹がサークルの合宿中で家にいなかった。いくらでも人を呼べる環境があった。

「ありがとう。こんな大勢で行って申し訳ないけど」

いずれにせよ、誰かの家を使わなくてはならない話だったから、別に良かった。その後のことを何一つ考えもせず、えみりはオッケーと言い出したのだった。予想もしていない現実が始ま



るなど、そのときは気付く余裕などなかった。

五人もの友人がいっぺんに自宅へ来る機会など、これまでなかった。せいぜい二人がいいところ。いくら二人暮らし〜ファミリー向けの物件とはいっても、あの台所へ六人が密集するのはさぞかし狭苦しいに違いない、と容易に想像してえみりは顔を歪めた。けれど、イレギュラーなことだから楽しいかも知れない。たまに起こることが異質な出来事だと、

生きていることが通常以上に愉快になっていくのだから。

近所の駐車場へ車を止め、女子二人はえみりと共に家へ入った。男子三人は魚の入った発泡スチロールを部屋まで運び込み、とても縦幅の狭い階段で、足の大きな男子にはとても窮屈で恐ろしい造りとなっている。主に中ちゃんが運んでくれたのだけれども無事に終わって何よりだ、とえみりは本当に胸を撫で下ろしたくらいだ。一貫出しへと行ってくれた。気を遣っているのか、

「何か片付けたいってもんもあるやろ。急にお邪魔したし。俺ら、その間に買い物行くわ」

鯖の味噌煮を食べたいというので、すくなくともえみりの冷蔵庫にはなかった味噌、みりんを手に入れてくるはずだった。ついでにお酒も一本ずつ頼むことにする。

時計をちらりと見やると、夜の十時半。お米を炊いたり、お菓子を食べたりして空腹を紛らわせる。林間学校のような、と懐かしくなって女子三人は盛り上がる。男子が帰ってくるまでの、束の間の時間。

ふと、誰も魚の捌き方を知らないことを思い出す。かなり過酷な現実ではないだろうか、とえみりは愕然としたのだった。いつ、あのまだ生きているような顔をした生物たちは、料理という食物となって私たちが普通に食べられるかたちとなるのだろう。どうやって？ どうすれば変わるのか。切り身や刺身など、何百回となく食べてきたモノの形状を思い浮かべて何とかしようとするけれども、不思議なことに彼らの変身していく過程を描くことができない。発砲の蓋を開けると、巨大なサイコロのような氷で覆われている魚たちの目が虚ろに見えた。たくさん目があつた。

部屋のパソコンで、魚の捌き方を検索する。「魚 捌く 方法」、「鯖 捌く 素人」、「鯖 味噌煮 レシピ」など詳細なワードを入れ込んでいくと、結構使いそうなページがヒットした。貫出しから戻った男子たちは遠慮もなく、えみりの部屋へ普通に入って来た。取り立てて大した問題ではないのだけれど。開いた画面をまじまじと覗き込みながら口々に言う。

「こんなんでできるかなあ」

「難しそやな。どうしよう」

三人共苦笑している。藪野サンだけは口の端に笑いだけ貼り付け、相変わらずクールなものだから何も言葉を発さない。ただ、どうすればいいだろうかとすこしは戸惑っている様子だけ見せている、というのは伝わってくる。意外と人間的に思えて、えみりは藪野サンのことを身近に感じる。実に稀なことだ。

再び台所へ戻り、尋常でない量の魚を見て、一同は立ち尽くす他ないのだった。これに包丁を入れなければ、何も始まらない。何も減っていかない。いつまでも食卓に食事が並ばない。空腹は安っぽいクッキーでは満たされない。クッキーは「船に乗る前に食べると酔わない」と誰かに言われ、それを信じて買っていた。ところが昼食を食べた後、車に乗っている間にすこし胃もたれし、その後何も食べたくなくなり、クッキーなど到底口にすることなど出来なかった。

「クッキーが船酔いに効くって何で？」

「嘘じゃないの？」

「絶対ふざけてるだけでしょ」

全員が全員、えみりが騙されたんだろーという言い方をするので、確かに言われてみればクッキー説は適当な話なんだろうな、と薄ぼんやりと考える。

後で調べてみたところ、クッキーは消化がいいので船に乗る前の食事として食べるのはお勧め、と書いてあった。決して、酔い止めなどではない。酔い止めでもないし、お腹も満たされない。あたりまえじゃないか。

ようやく重い腰を上げ、岩っちが包丁を握った。周りに男子二人が群がり、流しで彼が魚を洗うところからじっと見ている。まずお腹を切って内臓を出すんやんな、と魚の鈍い銀色に光る腹をすっと裂くと、どろりとした重量感のある臓器が飛び出す。

血はそれほど出ていない。血抜きをしたわけでもないのだけれど、意外なことに極めて少量の血。魚は人間よりも、血液量が圧倒的にすくないのだろうか。死ぬときに処理が大変ではなくていいな、と実にどうでもいいことを思った。

普通の包丁で苦戦しつつも魚をおろしていく。先ほどネットで情報をちらりと見ただけなのに、綺麗に捌いていく。初回とは思えないほど、かなり器用だ。岩っちは趣味でスイーツを作る人で、一ヶ月ほど前に手作りのマカロンをくれたことを思い出した。それがお店で買ったようなふわふわ感のある代物で、彼に「才能」があることを明らかにしていた。彼は元々料理のできる男子であるので、頼りにしてもいい気がする。

中ちゃん、藪野サンと続き、三匹の鯖をおろした。三人の男子は皆かなり丁寧に作業をこなし、魚屋の若い衆を見ているかのようなようだった。大袈裟に誉め過ぎたような気もする。適度に塩をすり込んだそれらをガスコンロの網の中へ並べて入れ、人数分焼き魚にする。容子は既に帰っていて、メンバーは五人になっていた。高田馬場にある彼氏宅で同棲をしている容子は、十一時をすこし過ぎた頃に出て行った。

もうすぐ日付が変わるのか、と時計を見て純粹に驚く。朝九時半に家を出てから、既に十四時間ほど経過していた。

魚を焼いている間に、鯛と鰹を刺身にする。鯛は鯖とは異なり、最初に鱗を落とす作業が発生する。ここでもまずは岩っちが先発で、包丁の裏で鱗を削り落としていく。

「痛っ！」

「大丈夫？」

心配になって駆け寄り近くに立ってみると、鱗がしゃりしゃりと顔や身体の到るところへ飛んでくるのだった。鱗が意外と硬いものだという発見があった。

しゃーないけど痛い、と笑いながら岩っちは鱗を落とし続ける。その魚の身体の一部、は冷蔵庫と流しの間へぱらぱらと落下して行く。フローリングにくっつき、同化するのではないかと思うほど、すっくりと溶け込んでいくようだった。ぱらぱら。しゃりしゃり。音を聴きながら、床が汚れることについて何も考えずにただぼーとした頭で、その場の情景を見ていた。岩っちの足元にも、そこから三十センチほど離れたところにまでも、鱗はまんべんなく飛散していた。

ちょうど日付が変わった頃に焼き魚が完成し、炊き立てのご飯と共に、一同は狭いテーブルを囲んで食べ始める。えみりの部屋に置いている巨大な社長椅子を、何とかキッチンダイニングへ運び込み狭苦しい環境で、おとなしく食事をする。

「美味しいね」

最初に口を開いたのはえみりだった。いつも食べている魚と同じ味がした。あたりまえなのだけれど、自分たちが釣った魚—えみりは一匹も釣ってはいないけれども—を食べるという行為は、自給自足というワードを常に頭の中へ浮遊させることでもあった。

皆は口々に「うん。美味しい」とぼそぼそと、馬鹿の一つ覚えのように繰り返した。そうやって、疲弊してすっぽり空いてしまった空間を埋めるかのような行為。

冷蔵庫へ入れておいた刺身も良い塩梅に冷えた頃、食卓へ追加する。鯛は岩っちと中ちゃんが担当し、鯉はそれを釣り上げた藪野サンが担当していた。どちらも見た目は美しく捌かれていて、刺身という完全なる食べ物のかたちとなって、スーパーに置いてある商品のように並んでいる。

「うん、美味いわ」

今度はまず中ちゃんが美味しいという台詞を発し、皆も先ほどと同じように美味しい美味しいと連発する。ただ、声に勢いや元気がなく既に疲労困憊しているのは明らかだった。それもそのはずだと思う。亜熱帯かと錯覚するほど暑い中、半日外にいたのだから。

焼き魚と刺身を食べ終わると、お腹はほぼ満たされた。さらに食べたいとは思わない程度。それでもみんなの背中後ろには、まだ何十匹もの魚がいる。その事実は変わることはなく、心労がひどくなっていく。何とかして処理しなくてはならない。愕然とする。

えみりにしては珍しく、これまでにないほどの責任感を感じていた。自分の家に大量の魚がいるのだという意識が、大きく影響しているのかも知れなかった。一度発砲スチロールを持ち上げてみると、その重量感は精神的な重さとなって跳ね返る。

私しかいない。私しかこの大量の生き物—もう死んでいるけれども。釣ってから八時間ほど経過している魚に新鮮さは感じなかった。鮮魚ではなく、死魚。死んだ魚といえるだろう、と思う—を何とかして食べられるかたちにできる人間はいない。部屋を見回してみても、疲労感漂うメンツが座り込んでいるだけだ。腰が重い、とは彼らのような状態を指すのだろう、と冷静に考

える。

「ねえ。私にも教えて」

「お、ええよ。えみちゃんもやる気になったんやな。中ちゃん、先生やりや」

岩つちに丸投げされた中ちゃんは素直に立ち上がり、流しの前に佇むえみりの横にすっ

と立つ。

「まず、水でさっと洗って。お腹に包丁入れて内臓出してみて」

なかなかすうっとスムーズに出て来ない。腸みたいなグロテスクな外観の臓器を、指で引っ張って見たが、ベチャッと顔に飛び散りそうで恐ろしい。

「エラの部分に斜めに包丁入れて」

中ちゃんの指示は続く。頭がぶらぶらする程度に、胴体と切り離すと途端に、「魚」は「切り身」に近くなっていく。生き物から食べ物への大きな変化が起こった。そこからは比較的巧く包丁を扱えたらしく、無事に三枚おろしふうになった。

「上手やん！」

岩っちの感嘆の声から始まり、みんなもすごいとかいいじゃんとか、褒める系のコメントを発する。後でひねくれた考え方をしてみると、褒めたのではなく巧いことを言って魚の処理をえみりにすべてさせておこう、という目的があったのではないかという、かなり性格の悪そうな結論が出てくるのだった。

それからただひたすら、魚を捌き続けた。両の腹だけ切り取られた魚の死骸が、流しにずらりと並んでいる。それらすべてが左目を上にして横たわっている。洗っては包丁を入れ再び洗い、という行為を繰り返す。積み重なっていく殺された魚。その数は容赦なかった。そのうち流しの深さを越えてしまうのではないかと、と恐怖に身悶えた。

もしそんなことになったら、確実に錯乱する。取り乱す。今ある容器、容量で収まっているときはセーフだけれど、そこを越える事態に見舞われたとき、自分の中で何かが決壊してしまいそうな気がした。限界か、限界に類似した何かを振り切ったとき、人は高い確率で発狂してしまうだろう。

「どんどん速くなってるなあ、えみちゃん」

魚を捌く手順を一通り覚え、すいすいと「完成品」を生み出せるようになった。まさに流れ作業。流れていくことに関して、何の感情もなかった。無心という言葉が一番ふさわしいかのように、切り続ける。職人になった気分がした。気付くと包丁が血や臓器で赤黒くぬらぬらとしていて、何十匹切ったか分からないそれを洗い流した。

一分以内で切り身を二つ生産するペースが確立した頃、まな板の横へいつの間にか切り身が山のようにそびえ立っていることに目を見張った。保存方法は冷凍しかない。たまに白目の状態になって、寝るか寝ないかの瀬戸際に立っている里奈をちよいちよいと呼び、ちょっとした作業を依頼する。

「この切り身を一つずつ包んでほしいの。ラップで。冷凍したいんだ。いいかな」

うんもちろん、と言い、二人の生産ラインがスタートする。里奈の手に広げられているラップの上に、一つずつ切り身をそっと置いていく。里奈はそれをさっと包む。ただ、ラップを切り取る時間がかかることに気付き、岩っちも加わることとなり、三人体制でのラインで再スタートを切った。

三十分ほど経った頃、すべての魚の処理は終了した。えみりは、自分がひどく不快な汗をかいていることに気付く。泥のようだった。気分が泥みたい。首筋まで貼り付いている鱗を発見し、さらに嫌な感覚が身体中を巡った。手足がかくかくしていた。今は早朝四時過ぎ。何時間台所に立っていたことだろうか。それにしても、今はとにかく流しに放置してある魚たちの死骸を片付けなくてはならない。食べ物としての魚の身と、それ以外の魚の身。非常にかっちりとした硬い線でそれらは区切られていて、線を跨いで進入してくることはないし、混じることもない。同じ魚の同じ身体であるのだけれど、まったく異質な要素を持っていた。バラバラということなんだ、とつぶやく。

部屋にいるすべての人間が眠っていた。里奈はえみりの部屋の窓際、中ちゃんはその逆でドア側、藪野サンは台所の椅子を三つ縦に並べてそれをベッドにしている。上品な眠り方。顔は貴公子のようだった。眠り姫ならぬ眠りプリンスか。岩っちは妹の部屋のドアの前で縮こまって眠っている。起こそうとは思わなかった。この人たちは魚を捕ってくれて疲れているのだ。中ちゃんはどうなんだ、疲れてはいないだろう、自分と一緒にほぼずっと船の上で寝ていたではないか、と異論を唱える自分はいたけれども、処理作業は一人でやろうと決めた。

四十五リットル入るゴミ袋を二重にした内側へ新聞紙を敷き、そこへ流しから魚の死骸をひとかたまりずつ取って、放り込んでいく。ぬるっとした感覚が一定期間持続している。袋を支える手に、ずしりとした重さがのしかかった。かなり重たくなりそうな予感がある。すべて袋に収めたとき、量が多過ぎて袋が破れるのではないかと心配になった。もっと新聞紙をたくさん敷いておけば良かったと後悔もする。

半透明の袋から、魚たちの濁った目が見える。鈍い銀のお腹が大量に重なり合っている。もはや何も感じなかった。気持ち悪くも怖くもない。ただ、そこにいるといった風情。とりあえず袋の口を一枚ずつ縛る。袋に顔が近付いたとき、わずかな生臭さが鼻をつんと刺激する。まだ磯の香りが多少あり、顔を背けたくなるほどの生臭さとは違った。袋の中の空気を完全には出し切れなかったけれど、とにかく封じ込めた。魚たちの入っていた発砲スチロールの箱も、ついでに処分する。中に残っていた臭みのある氷や水を、台所の流しへすべてぶちまける。氷は頑丈で、なかなか溶けそうになかった。お湯をかけて溶かそうと試みる。空になった箱もゴミ袋に詰め終わり、魚のゴミ袋と共に玄関の外に出す。ゴミを出すときはいつも、自分が角部屋に住んでいることにとっても感謝する。端だからこそ、ゴミ袋を出しておいても他人の邪魔にならないから。二つ並んだ大きなシルエットのそれを見て、大きな仕事を成し遂げたときと似た感覚があった。

極度の疲労感が身体に襲いかかる。せめてよれよれになったメイクを落としてから眠ろうと思ったのだけれど、そんな僅かな力すら湧いてこなかった。玄関のドア付近にごろりと転がり、そのまま深い眠りへと落ちていった。

完全に女子力失つとるやん、という言葉や笑い声で、えみりは眠いながらもムツとして目を覚ます。気にしている「女子力」という言葉にはとても敏感になる。芋虫のようにもぞもぞと身体を動かす。硬い床の上で三時間ほど寝ていると、身体の各所にある骨たちが随分軋む。身体を伸ばすと到るところからボキボキ、バキバキといった小気味良いというより痛々しい音が鳴った。筋肉が痛い。ほとんど休まっていない睡眠なのだろう。

朝が特に低血圧な里奈を起こしに行った。不機嫌そうな白い顔に、取れかかったアイメイク。メイクをしたまま眠るという、ひどく不健康な行為にすこし憂鬱になりながら、みんなを外まで送る。

「見て。ゴミをまとめたらこんなになった。すごい量でしょ」

部屋の外へ並べたゴミを指すと、おおこんなにもという感嘆の声が上がる。日が差し始めていた。燃えるゴミ収集日は火曜日。燃えないゴミ収集日は水曜日。今日は日曜日、ということを感じるというくらい暗鬱な気分になるのは、致し方ないところだろうか。

皆が帰って行った後も相変わらず、ボリュウム「強」にして換気扇をかける。ゴーゴーという物凄い音で、生臭い空気を吸い取るようにした。外に魚たちを出したものの、まだ部屋中に魚の臭いが充満しているような感覚。自分自身が生臭いのかも知れない。一晩中風呂に入らなかったことに気づき、えみりは慌ててバスタブにお湯を張る。

身体が鉛のように重かった。カチコチに固まっているみたい。マッサージに行こうと思いつき、早速電話で渋谷にあるアロママッサージを予約した。

そうこうしている間に、実家に帰っていた妹の小百合が帰宅した。

「すごい量の魚のゴミだね」

一言つぶやいて家の中へ入ってきた小百合は、アイスがあると思って期待したのか、すかさず冷凍庫に手をかける。うわ、すご。ここでも驚きの声。何しろ冷凍庫には、おびただしい量の鯖の切り身が格納されている。当分小百合は蛋白質に困ることはない。バイトをしているけれど、お金は色々必要なので彼女は何かと節約している。自炊することも多いので、魚は嬉しかったようだ。

昼過ぎに家を出た。ほとんど眠っていない頭は、逆に冴えているようで不思議だ。玄関のドアに鍵をかけた後、肩越しに振り向く。明け方に設置したときと同じ状態で、すこしも変化など見せず、魚のゴミはそこに佇んでいた。静物画のように、ひっそりと。

青い空に白い雲。ミーンミンミンミンと、死ぬ前の最後の力を振り絞って鳴く蝉。カレンダー的に夏は終わりを告げようとしているけれど、肌に触れる大気や熱風は常夏のまま。立っているだけで、生きているだけで、皮膚の到るところにじわりと汗が滲む。それ以上は見たいなくて、振り返らずにえみりは歩き出す。



渋谷という都心は、さらに熱帯の雰囲気を感じていた。人口密度の高さが、ひどく煩わしかった。人間の密集した横断歩道を歩いて見知らぬ相手の人肌に触れてしまった瞬間、ベタベタした感覚が移り一瞬で不愉快になれる。

マッサージを終え、軽く買い物をして家路についた。気分は良かった。僅かであれど涼しい風が吹くようになっていたし、日が落ちて日傘を差す必要もなくなったから。

最寄り駅を降り、家へ続く道を歩く頃になってようやく、魚の残骸たちの存在を思い出した。夢から現実に急に戻った気分。この日一日の暑さを思うと、あれらがどう変化しているか急に恐ろしくなった。出かけてから半日も経過していない。それでも、異常な気温がそれらを変質させているであろうことは、たやすく予想できる。怖い怖い怖い。怖過ぎる。それよりも、とえみりは別の恐怖を想像して泣きそうになる。烏が魚に気付いて、あの袋を乱暴に突いていたとしたら。玄関の前に腐った魚の身体がバラバラになって、散らばっていたとしたら。血生臭い臭いが充満して、凄惨な状況が広がっていたとしたら。嫌だ嫌だそんなことになっていたら、ショックで飛び降りたくなりそう。

怯えつつアパートの階段を一段一段、上っていく。階段を四分の三ほど上ったところで、明らかな異臭を察知した。生ものの腐敗した臭い。直射日光ではないにしても、亜熱帯のような気候の中、外に置きっ放しにしていたのだ。ゴミに近付くにつれ、ぶるぶると震えがやってきた。本当にひどい臭い。恐ろしくなる。

周囲の人たちがもし窓を開けていたら、確実に臭うだろう。帰宅してアパートの外廊下を歩いているだけで、恐ろしい腐乱臭を感じ取るのだから。日がな一日家にいて、エアコンをかけずに過ごしている住人がいたらと思うと、身体中の毛が逆立つ思いがする。申し訳ない。本当に申し訳ないです。そういう気持ちより勝るのが、殺されたらどうしようという思いであるのが、実に自分勝手なようだけれども怖かった。泥沼化した隣人問題—毎日騒音がひどいとか、ゴミ屋敷に住んで嫌な臭いを出しているとか、猫屋敷に困らされているとか—をメディアで見ているうちに、他者から恨まれる可能性を考えてしまった。

妄想は果てなく広がっていく。隣の部屋の住人が、ベランダ越しにえみりたちの部屋へ乗り込んでくる。臭過ぎなんだよと叫びつつ、髪を振り乱しながら、包丁で突いてこようとする。逃げ惑うえみりと小百合。正気の沙汰とはいえない表情の女は、どこまでも追ってくる。狭い部屋の中を家具にぶつかりながら、物を床に落としながら、逃亡劇を続けた。最終的に、風呂場で腹を刺された。そこで妄想は終了した。

別の妄想もした。向かいの建物に住む家族が、窓を開けて怒鳴っている。音は聞こえない。白黒の無声映画を観ているかのようだった。また異なるシーンが出てきた。玄関のドアに赤い文字が踊っている。どうやらすこし遠く離れた場所からそれを見ているらしいえみり。何が書いてあるのか徐々に見えてくるのは、彼女がドアに近付いて行っているからなのだろう。「死ぬ」、「腐ったもの放置するな!」、「生ゴミハウス」、「死骸野郎」などといった乱暴な文言が殴り書きされている。血で書いたようなふうに見えるのは、呪いをイメージしているからだろうか。

家に入ると、どんよりした微かな生臭さは持続していた。いくら換気扇を回そうともさほど意味はなく、完全に臭いがこびり付いてしまっているかのように思われた。小百合は自分の部屋に

閉じこもっている。どうしてもゴミの臭いについて共有しておきたかった。

「小百合、臭いがヤバい。どうしよう。あり得ないくらいひどい」

寝ていたらしい小百合は呑気に、「何がぁー？」と間延びした声を出している。そんな場合じゃない、と罪のない妹を怒りたくなる気持ちを抑える。軽く説明をする。外に悪臭が漂っていること、近隣住人に迷惑なこと、恨まれて殺されるかも知れないということ。ちょっと外に出てみると言い、妹は外気を吸うために玄関ドアを開けた。うっと咽せそうになる気持ち悪い大気が、ドアの隙間から部屋へ入り込んでくる。

「早く閉めて」

「臭過ぎる。ひどい。これは迷惑過ぎるわ」

小百合は顔を歪めた。これをそのまま、火曜日の収集日まで放っておくわけにはいかない。そんなことをした暁には、確実に戦慄のときが訪れるだろう。

「どうすればいいかな。もうこんな時間だし」

悩んで何も手につかないのはもちろん、空腹感も失せていた。人を怯ませるレベルの猛烈な悪臭を嗅いだことで、身体にダメージが与えられたかのようだ。ただうろたえることしか出来ない自分が、とても情けなくて失望する。じたばたしたって始まらないのに、慌てふためいてしまう。いい案も浮かばない。

ひとまず、あのゴミを撤去すれば無問題。では、撤去するにはどうすればいいか。何かをするためには、実行を目指してどうするかについて考えなくてはいけない。社会人になって、大人たちからそんな旨のことを口を酸っぱくして言われたものだった。

「引き取りに来てもらえばいいんだ。一万円くらいなら出す。それであの臭いから解放されるなら、高くはない」

えみりは宣言する。そして「ゴミ 引き取り」、「ゴミ 回収 品川」などというワードを打ち込んで検索すると、色々な業者が出てきた。しかしほぼ九割の業者が、「生ゴミは回収しておりません」という注意書を掲げていた。想定外だった。道が完全に絶たれたようで、肩を落としてしまう。一瞬で打ちのめされたり、目の前が暗くなることなんて、世の中にはごまんとあるのだけれど。

「お姉ちゃんどうよ」

部屋に入ってきた小百合に、小さく首を振って応じる。それでも諦め切れない部分が、えみりの中にまだ残っていて、生ゴミは回収不可と“一応謳ってはいない業者”に電話をかけた。

「生ゴミは引き取らない、とは書いてなかったですよ。お金は払うんで、引き取ってほしいんです。できれば今夜中、無理なら明日の朝一で」

必死にアピールした。悲壮感や焦り感は、しっかり伝わっただろうか。

「生ゴミはねー、引き取りやってる業者は少ないですよ。やっぱり、ちょっと敬遠されるんですよ。まあ、うちはいいんですけど。でもね、今日はもう終わっちゃったんですよ。明日でも昼間は埋まっているので、伺うのは夕方になってしまいますね」

行けても夕方、という言葉に落胆の色を隠せなかった。最悪の場合、その業者を呼ぶことになるだろう。まだじたばたしたい気持ちがあり、一見したところすこし怪しい筋を思わせる業者へも連絡を入れる。「何でも引き取りに伺います」という、血の流れる様子をイメージしたような文字が踊るホームページは、誰がどう見ても如何わしい。殺人系の依頼なども請け負うのだろうか。

誰かの携帯番号のようだったが、残念ながらその業者は出なかった。えみりはパソコンの前で頭を抱えた。

魚魚魚。ぶつぶつ呟いているうちに、最高な案を思い付いて、小百合の背中に呼び掛ける。

「ねえ。鮭屋さんに引き取ってもらうのはどうよ。一万円払うのでお願いします、って言えばやってくれそうじゃない？」

「おお！ それいいかも！」

アパートから徒歩二分ほどのところに小さな鮭屋があり、それをターゲットにした発言だった。それ以外にも、鮭屋は何かと周囲に多い。

「鮭屋とか肉屋とか魚屋だったら必ず、生ゴミを入れる倉庫みたいなものがあるはず。前バイトしてた鮭屋にはあった。今のコンビニにもあるよ」

「そうか。なるほど。ゴミ収集日まで忠実に待ってられないものね」

どういうフローで鮭屋に魚のゴミを持ち込むか、二人は真剣に話した。お客でもないのにいきなり店を訪れて、その他のお客の前で、お金を払うので魚の生ゴミを引き取ってくれませんかなどとは言えるわけがない。電話をかけて相談する方がいい。いや、それでは顔が見えない分、必死度や熱意が伝わらない。うーん、どうする。

「鮭屋って、敷居高くない？」

もっとお願いしやすいところ、というのがあると思うのだ。スーパーとか、コンビニとか。

「まあ、そうだね。スーパーにしてみる？ それか魚屋。もし、どうしても無理だったらうちのコンビニだね。私が店長に頼んでみる」

えみりは、妹の意外なほどの協力体制や心強い言葉に感謝した。コンビニでバイトをしてくれていて良かった、とそのときほど嬉しく思ったことはない。

「あなた、いい子だね」

「え。だって迷惑行為じゃん明らかに。隣人に殺されたくないし」

拍子抜けするほど、最後の発言は自分と似通っていた。

時計の針は、八時をすこし過ぎた時間を指している。急がなくては。冷静な思考を開始した。一定距離を、異臭を放つゴミを持って歩くこととなる。すれ違う人には変な顔をされるだろう。二重にした袋では、既に効果がなくなっているはず。またあの臭いに触れるのが恐ろしく、マスクをして外に出た。マスクのみでは隙間から臭いが入ってくるので、

ハンカチをマスクと鼻の間に挟んだ、異様な顔だ。そんな顔をした若い女子が二人、アパートの外廊下で汗だくになりながら、臭いゴミ袋と格闘している。

小百合にも手伝ってもらい、袋を五重ほどに重ねてそれぞれ口をきつく縛る。空気がすこしずつ入って、最終的に袋は当初よりも膨らんでしまったがやむを得ない。袋を三枚上に重ねたことで、臭いがかなり抑えられたことの方が有意義で重要な事柄だった。マスクを一瞬外してみても、悪臭はほとんど残っていなかった。複数あるうちの重荷の一つが、ようやく取れたと感じた。

お姉ちゃん、と背後の小百合が言った。

「終わったらアイス買ってよ。約束だから」

かわいくてお安いレベルの願いだと思い、二個でも三個でも、とえみりは返事をする。スーパーや魚屋がある方向に向かって歩いていると、急にえみりの脳内はクリアになった。限界状態のときこそ、素晴らしい能力を人は発揮するのではないだろうか。どこかのビジネス本に書いてあった気がする。

「いいこと思い付いたよ！ ゴミ収集日って、各地域によって違うんじゃない？ もし明日収集するところがあれば、そこに置いておけばいいんじゃないかな。明日の朝、回収してくれるわけだから。業者に頼んでも明日の夕方。だから、明日収集する地域を探すのがベストだと思う」

「なるほどね。今iPhone持ってるよね？」

iPhoneを取り出し、隣の区域のゴミ収集日を検索する。こういうときにiPhoneを持っていることは、ひどく便利なのだった。地図も見えるし。

「おっ！」

思わず大声で、ガッツポーズをして叫びそうになった。隣の区域の一部のみ、燃えるゴミの収集日が月曜となっている。地図で表示させてみると、たまに通るエリアからすこし離れているだけで、決して行けない場所ではない。

「ここへ行こう。ここへ置いて帰ろう」

目標地点を何となく定め、なるべく目立たない道を歩いていくことにする。人目につき過ぎるのはマズい。車の往来の多い場所も、気を付けなくてはいけない危険なエリアの一つだった。

えみりが魚のゴミ袋、小百合が発砲スチロールを入れたゴミ袋を持つ。発砲の袋は「どこかで買ってきた荷物」のようにカモフラージュできているようだったけれど、魚のゴミ袋は見るからに「明らかなゴミ」で、偽りようがなかった。弁解のしようがない状況は非常に苦しい。

不法投棄でもするのかと、近隣住人や偶然すれ違った警察なんかに訊かれたらどうすればいいだ

ろう。いくつか言い訳を考えながら歩く。十五キロくらいあるのだろうか。十数メートルほど歩くだけで手が痛くなり、疲れた重いなどと言いながらその度に地面にゴミを下ろし、手を持ち替える。

前方にスケボーをしている上半身裸の若者が二人もいる。変に刺激しないよう、到って普通の表情を作り、目をわざわざ合わせることなくさっと通り過ぎようとする。ありがたいことに、若者はこちらに無関心だった。ゲームでいうようなファーストステップを無事クリアし、汗だくのまま進んで行く。

今していることはゲームのようで、夢みたいでもある。

「ねえ、なんかさ、可笑しくない？」

えみりは工夫して発砲スチロールを自然なかたちで持っている妹へ、笑いながら話しかける。

「え、何が？」

「汗だくになって必死に魚のゴミを運んでる、この状況が。しかもあんたマスクしてるし、こんな暑い中。どう見ても怪し過ぎる。お互い巨大なゴミ袋持ってき。何入ってんだろって感じだよね。かなりの注目を集めてるよ」

「あたしは姉に巻き込まれてるだけです」

冷たく突き放され、すみませんねと素直に謝る。

「もし、人に怪しまれたらこう答えようと思うんだけど、どうかな？ 魚釣りをしました。料理してゴミが大量に出ました。けれど収集日まで日がありますってあたりは、きちんと真実を話すのね。創作するのはその後の事情。友だちの家が××地区にあるんです。友だちの部屋から出たゴミとして出してくれる、っていう話にまとまったんです。今はその友だちの家へ持って行く最中なんです。これどう思う？ 信じてもらえそうかな」

「うん。無難で大丈夫だと思う。まあ、それくらいしか、言い訳できなさそうだけど」

頭に浮かんだただ一つの案は、存在し得る唯一の案でもあった。ひたすら歩いた。iPhoneの地図を開いて目的地をチェックすると、ほとんどすぐ傍に「可燃ゴミ収集日が月曜日エリア」が迫ってきていた。心がだんだん晴れてくる。もうすぐゴールだよ、と小百合を励ます。ただ、一点越えなくてはならない関門があった。あーこれやだねやだね。

「何なの？」

えみりは大通りの方向を指差した。

「あそこを渡らないと、ゴミ捨てエリアに行けないのよ。あんな大きな道を、こんなもの二つも抱えて運ぶなんてやだね。超やだよ。危険だよ」

でも仕方ないけど、と最後に言い残し、信号が変わると同時に大通りを渡り始める。車に乗っている人や前方から自転車や徒歩で向かって来る人の顔はすこしも見なかった。あえて見ないように試みた。とにかく急いで人目につかない場所へ行ってしまうに決めた。目立ちたくない、という思いが何よりも先行し続けていた。

とてつもなく長い道のりに感じられた。横断歩道という数メートルの道路が。渡り終えたところにすぐ、ゴールがあるわけではない。それでもひとまず大きな難所をクリアしたことは確かだった。目の前に大きな総合病院がそびえ立っていて、その裏手がゴミを捨てられる一帯となっているはずだ。地図によると。ようやく解放される、と希望に満ちた心でゴミ捨て場らしきところを探してはみるが、なかなか見つからない。

道路は意外と起伏が激しかった。無駄に汗の雫が額から流れ落ちる。ゴミ袋の重量が食い込んだ手は痺れたようになっている。途中何度も足を止めて休憩するも、普段「ナマモノ」という特殊な類の重い荷物を持つことのないえみりが、この重さに慣れることはないだろう。

住宅街と工場が隣接している、坂道ばかりの区域。ここに住む人は色々な点できついでだろうなと思う。歩いて上ること、自転車で上り下りすること、どれも大変そうだった。転げ落ちそうなくらい苦戦する坂。

「一向に見当たらないね。ゴミ捨て場」

小百合は無言で頷いた。彼女の機嫌が徐々に悪くなっているのを感じ取り、ゴミを素早く片付けなくてはと焦る。曲がり道の向こうに歩道橋が見えた。そこを渡った地域は該当エリアだろうか。どんよりと濁ったクリーム色の壁の集合住宅に、住所の札がかかっているけれど、残念なことに数字が見えない。ちょっと待っててと言いつつ、ゴミを小百合の隣に置く。

「すぐ戻るから。向こうの住所見ってくる！」

小百合の返事も待たずにダッシュで駆け出し、歩道橋の階段を一段飛ばしで上がっていく。小学生以来の行動に息が切れるのも構わず、一気に駆け下りる。集合住宅の住所プレートの前へ急いだ。その瞬間、また同じスピードで引き返す。

ついてない。最悪。絶望リフレイン。この一日で何度絶望を繰り返していることだろうか。歩道橋の上から小百合に向かって両腕で大きくバツ印を作ってみたけれど、目の悪い小百合はこちらに身体を向けているのに、まったくえみりの姿が見えていないようだった。視力が両目とも1.5あるえみりは、かなりの範囲でものがよく見える。たとえば小百合の詳細な表情まで、分かってしまう。小百合は静かな怒りを湛えた顔をしている。適切なフォローをしなくては、と考えながら下へ降りていく。

「駄目だ。向こうは全然違う住所だった」

「そっか。あっちへ移動しよう」

狙い目はアパートやマンションのゴミ置き場。そこであれば、誰が出したのか特定されること



はない。田舎にはあったのだが、ここ品川区では「住宅街全体でのゴミ捨て場」というものは存在していなかった。個々人の家では、それぞれの家の前へゴミを収集当日の朝に出しておく。アパートやマンションでは、それぞれの建物が所有しているゴミ収集用ボックス、または網が設置してあるゴミ置き場へ収める決まりとなっている。

だからアパートを探したい。もう何をしたいか、というのは分かりきっていた。あとは、それを探すのみ。素材を探すだけで問題は解決する。仕事よりずっと楽なのだけれど、な

にぶん身体を酷使し過ぎた。様々な意味で。

二人は黙々と歩き続ける。無意味に歩かせていることが何だか申し訳なくなり、一人で探し歩こうと決めた。小百合には止まって休んでもらおうと思った。

「私急いで走って探してくるから、ここにいて。重たいでしょ？」

うん、と小百合が重々しく頷くのを確認し、えみりは歩を進めた。前方に老婆がいて、自分の家用のゴミ収集用ボックスへゴミを取めている。そこに入れたいという衝動に駆られる。老婆は自宅前の道路の掃除まで始めた。今掃除しなくていいですよ、と心の奥で舌打ちしながら通り過ぎる。そこから走った。目の中に汗が入りそうになる。アイラインやマスカラが滝のような汗で滲んでいそうだったけれど、気に留める必要などないので手の甲でごしごし拭いた。

何分ほど走っていたのだろうか。ようやく中くらいの大きさのアパートを発見した。アパート一階玄関のドアは開いていた。そこから階上へ続く階段の壁に、ゴミの出し方ポスターが貼ってある。ただ、このアパートの外どこにゴミを置いているのかは分からなかった。前日の夜ともなると、誰か一人くらいゴミを出していても良いようなものだけれど、ただの一つもゴミ袋は置かれていないのだった。これでは参考にならないし、変な位置に置いてしまうと怪しまれる。どうしたものだろうか、と頭を抱える。

ふと時間を確認しようとして、iPhoneや財布を入れた小さな鞆までも、小百合に預けていたことを思い出した。最悪、ここに置けばいいや。新しい住人であれば、置き場所を間違えることもある。許されないことではないはず。そう自分に何とか言い聞かせ、小百合の元へ戻った。無理矢理自分を納得させることほど、気持ち悪いことはない。後ろめたさから、逃げるようにその場を離れた。

「お待たせ。ごめん」

小百合が腕を組んで仁王立ちしていた。確かに、幾分か長時間待たせたような気もする。

ねえ、何なのさ。小百合がキレている。

「何であたしが、魚のゴミと一緒に長い時間、一人で放置されなきゃいけないわけ？ しかも、姉のゴミと荷物まで押し付けられてさ。意味分かんないから！ まだ一緒に行った方がマシだし。じろじろ見られるわ、あんたいつまでも帰って来ないわ、連絡はないわ。ひど過ぎるし」

「ごめん。帰りにファミレスでいくら食べてもいいから」

食い意地の張った妹には、食に関する太っ腹な提案をするのが最も効果的だ。

「たくさん食べてやる」

「アイスでもケーキでも何でもどうぞ」

ここまで付き合わせたお礼に、それくらいするのは構わない。むしろ当然のことと思えた。小百合の機嫌を損ねたままでは、確実に生活に不具合が生じる。せめて通常状態に戻しておく必要がある。最低でもデフォルトに。

しかし「重荷」はまだ、すこしも変わることなくそこに存在していた。

「おっ？」

えみりは目の前のアパートの隣の家の塀から、ネットが釣り下がっているのを発見した。

「これ、ゴミ置き場じゃない？ このアパートの住人の。アパートの階下には、どう考えても置く場所ないじゃん。だからすぐ隣の家のここに置くんじゃないかな？ この家の人は大家さんでさ。だって、一軒の家がゴミ出す用にこんな巨大なネットは使わないでしょ。だから、確実にアパートの住人がゴミ出すんだよ。ここに」

かなり自信満々に、根拠らしき事柄を挙げていく。「正しいってば！」という感じを前面に押し出して主張したけれど、小百合は浮かない顔をしている。

「そうかな。でも、うちみたいな普通のアパートはアパートの敷地内というか、目の前の道路に出すんじゃないの？ もし違ったらどうするん」

訝しがる表情はさっきから一向に変化しない。えみりは自分の考えが正しいと信じていた。ここで何とか説き伏せて、さっさとゴミと別れたいという気持ちが強まっていく。魚の目や頭や内臓の入ったゴミ袋は、色々な意味でえみりにとって鉛のおもりであるかのようなだった。足首に頑丈に付けられたおもりは、身体という枠を飛び越えて精神にまで通ずるのだと、今回のことを通じてよく理解した。だからこそ、早く手放そう。そして楽になろう。妹よ。

えー、違ったらどうすんの。そう繰り返す小百合を無視して、ゴミを道路の端に運んだ。二つ並んだ巨大な袋は、一体何が入っているのだろうと思わせるくらいにポリウムがある。夜の闇がそれらを曖昧な形状かつラインに見せて一応誤魔化しているけれど、明るいところで見ると怪しみの塊に見えるような、そんな袋。

「もう行くよ。早く行こ。明日になったら回収されているから。ここはゴミ収集場なんだから」

何故だか赤ん坊のようにぐずる小百合を引っ張って、現場からいそいそと立ち去る。軽くなったし軽快に走ってみようと試みたけれど、そうはできなかった。意外なことにすぐに気持ちが楽になるわけではなかった。行きと変わらず重い足を引きずりながら走るのだった。

あたしさ、と小百合が暗い顔をして言う。

「ん？ 何？」

「犯人は必ず犯行現場に戻る、っていう気持ちがすごく分かる」

突拍子もないことを言い出すものだ。犯人じゃないし。そもそも犯罪じゃないし。

「私たちは犯人みたいなものってこと？ おかしな発想。さすが若い子だわ」

五歳年の離れた妹は実際とても柔軟な考えを持っている、と二十四歳は感じる。最後に茶化すことで気分を明るくしようとした。けれど小百合は深刻な顔を保ったままだ。

「あたし、明日の朝あそこに行くと思う。本当にあのゴミがなくなってるか、この目で確認しておきたい」

奇妙な使命感に燃えている。いや、単純に使命感ともいえないような気がする。不安や恐怖によって駆り立てられる、人間の本能的な心理なのだろうか。

「あなた、明日朝早く家出るって言ってなかった？」

早朝に出発して友だちとプチ旅行に行く、と小百合が話していたのを思い出して問い掛ける。

「うん。でも、行くと思う。どんなに早起きしてでも、あたしはあそこに戻るよ」

固く結んだ唇。それと同様に決意も固いようだ。勝手にしてくれていいと思った。

「ていうか、今日のごめんね。何でも好きなもの食べて」

自分を落ち着かせるためにも、心を安らげるためにも、どこかで座って休みたかった。とにかく、あの場所とあの物体から離れて、気持ちをすこしでも切り替えたいと切望していた。

一度利用したことのある、イタリアンを提供するファミレスへ入る。ケーキとアイスのどちらを食べるか悩んでいる小百合へ、どちらも食べればいいじゃん、と気前のいい発言をしておく。やった一ホントに、と目を輝かせる妹は不意に子どもっぽくなる。

逆に、えみりは何も食べる気にならなかった。目の前で小百合がデザートを頬張っていても、何も感じないのだ。不思議なことだ。あれほど「激しい運動」をしたというのに、すこしも空腹感はないし、疲弊し尽くしている感覚しかない。喉だけは渴いていたので、ドリンクバーのみ注文する。

「あ、そういえばマズいことが起きた場合、マズいわ」

そりゃそうだろう、と突っ込まれそうな発言をする。小百合が、何だよという顔をするのにも構わず続けた。

「もし、あのゴミ袋がゴミ収集者以外の何者かに開けられた場合、私たちが捨てたってことがバレる」

「どうして？」

「家出る前に、魚のゴミと燃えるゴミを併せたじゃん。その燃えるゴミの中に、水道の使用料金通知葉書を捨てていたと思う。今日捨てたばかりだから、覚えてる。あれに住所書いてあるでしょ。名前も。要は、個人情報特定されるものが入っているわけ。重要な証拠がね」

ああ、といって意識的に虚ろな目をする。えみりの視線の先にある、壁に貼ってある大きな鏡に、どんよりと疲れて曇った顔をした女の顔が映っている。たった数時間で急激に老け込み、やつれたふうに見えてぞっとする。あまりにも巨大過ぎる精神的重圧は、人の身体をいとも容易く蝕んでしまうらしい。身をもって体験するというのはこういうことかと悟った。

「顔がムカつく」

ケーキの最後の一欠片を口に運びながら、小百合が突然言う。「は？」と問い返すと、

「わざと老け込んだ顔をしてるのがイラッとくる」

「ねえ、あなた喧嘩売ってます？」

「いや、別に。見たままの事実を言っただけ」

「私はね、本当に疲れたの。みんなもさあ、あんなにゴミ押し付けて帰ってさ。ひどいよね。ていうか、多分ゴミのことなんて考える余裕なかつたら仕方ないことなんだけど。でもさ、あれを抱えて火曜日の朝までは過ごせないわけじゃない。超重たい案件だよ。あれは鬱になる。こんな顔にもなっちゃうわけよ。精神的に追い詰められるでしょ。分かってくれるかしら」

自分の言いたいことをすべて言い尽くした後、小百合の表情を見ると、先ほどとまったく変わりがなく何だかつまらないなと思えた。大きく伸びをする。身体の節々がポキポキと軽快な音を立てる。

「ていうか、姉、もう釣り行くな」

小百合が端的にまとめた。苦勞を一言でまとめられた。

ゴミを必死に運んでいるときから、ふざけたことを構想していた。それを小百合に共有してみようと思った。

「ね、あんた気付いてた？」

「え？」

「さっき、怪しい人が私たちの後をつけてた。私が『走ろう』って言って、あの人をまいたけどさ、危ないところだったと思うよ。眼光鋭い感じだったから、刑事関係かすくなくともそれをリタイアしたあたりの人かも」

何適当なこと言ってんだよ、と言いたげな目で姉を見る小百合。

「信じたくない気持ちは分かるけどさ。でも、本当だよ。気付かない方が幸せかもだね」

「ふーん」

「もし、あんたの言う通りゴミが回収されなかったとして、警察に届けられたらどうなると思う？」

「うちに押し寄せて来るんじゃない？」

鼻の横にできたニキビを触りながら、小百合はやる気のなさそうな返事をする。

「それからどうなるかな。そこから先を考えてみたくない？」

「どうでもいい」

帰ろっか、とえみりは伝票を持って立ち上がった。手がすっかり軽くなった帰りの夜道は、行きとは違う景色に見えた。月が丸い。ただ、自分に魚のゴミの腐臭がびっしり染み付いている気がした。手をファミレスのお手洗いで何度も洗ったのに、未だに魚の臭いがする。手に食い込んだビニール袋に、魚臭が付着し過ぎていたのか。くさいくさい、ああくさい。馬鹿みたいに跳ねるように口ずさみながら歩いた。

よく見かける、隣の家猫だろうか。いつもは塀の上から、やたら挑戦的な視線を投げってくる猫が、今夜はやたら擦り寄ってくる。見知らぬ黒猫も、足元へくつついてくる。何かを感じ取っているに違いない。

今夜はいつもとまったく異なる、奇妙な夜だ。気が付けば、二時間以上経過していた。それほど遠くもないエリアなのに、なんだかんだ長時間走っていたという事実があった。

犯人は犯行現場へ戻る、か。刑事ドラマをよく見ている者の台詞だと思った。仮に、これが犯罪扱いされてもされなくても、えみりは現場へ戻る気はなかった。あのゴミは処分されるはずだと信じているから。

「ねえ、小百合。冒険したね、冒険」

「うっぎー。マジもう一生無理」

アパート外廊下の魚腐臭は、ほとんど消えていた。まるで夢であったかのように、魚の痕跡は消えていて、証拠といえば自分の手の臭いだけだ。

(完)